

## 聖地エルサレム訪問記

高間 満

3月14日(木)から21日(木)まで、往復の機中泊2日を含めて7泊8日のヨルダン・イスラエルの旅をしてきました。

関空からドバイを経由してヨルダンの首都アンマンの空港に降り立ったその日は、まずマダバという小さな町にある聖ジョージ教会に行きました。ここには6世紀頃につくられたエルサレムの街を精巧にモザイク地図化した大きなフロアがありました。その後、モーセゆかりのネボ山に向かいました。標高800メートル位のなだらかな山でした。視界を遮るものもなく頂上からはヨルダン川、死海、さらにカナン地方を一望できました。すぐ対岸にはエリコ、少し遠くにはエルサレムが遠望できました。モーセはこの地点で、カナンの地を臨みつづ神に導かれた波乱の多い生涯を終えたのだと感傷的な気分になりました。

その後、「幻の都」ペトラに向けて、荒涼とした埃っぽい原野をひたすら南下しました。そこはモーセの時代にはモアブ、エドムとよばれた地です。とくにエドムは創世記にあるヤコブとエソウに由来し、ヤコブの家族がイスラエルの国民になったの対して、エソウの家族はエドムの国民になりました。バビロンがエルサレムを攻めたときには、ともに攻めたことがオバデヤ書にあります。そのエドムの首都がペトラでした。紀元前1世紀頃にはエドム人は追いやられ、ここはナバティア人により隊商が行き交う交易都市、ナバティア国の首都として栄えました。ペトラ一帯は岩礁地区で入り口には切り立った岸壁に、あのインディ・ジョーンズの映画で知られた王家の墓などが精巧に刻み込まれています。この地域にはこうした美しく彫刻された墳墓がいくつも点在しています。3日目の旅程ではここを何と2万5千歩、歩き回りました。

4日目は前日の高速道路を逆に北上し、死海に向かいました。死海は世界で一番低い地点のマイナス400メートルに位置する湖です。その日の気温は20度で陽光が眩しく湖は碧く輝いていました。毎年1メートルずつ水位が低下しているとのことでした。記念に新聞を両手に仰向けに浮かんでみました。宿泊ホテルのベランダから眺める夕陽や朝陽に映える湖の風景が圧巻でした。5日目は厳しい検問後、国境を越えてイスラエルに入りました。国境近くにはベドウィン族による放牧があちこちでなされていました。そして聖地エルサレムに入

りました。新市街地は近代的なビルが林立する都市です。一気に交通渋滞となりました。まずオリブ山に向かいました。オリブ山からの旧市街地、岩のドーム、シオンの丘の眺めは格別でした。かつては一面、オリブ林だったとされるゲッセマネの園を訪れた後、そのままベツレヘムに向かいました。巡礼客が多く聖誕教会はまさに牛歩のような混雑ぶりでした。この教会をイエス生誕の地としたのはコンスタンティヌス大帝の生母ヘレナであり、建立は大帝とされています。現在はギリシア正教会が管理しています。教会前の中庭には聖書のウルガタ訳をしたとされるヒエロニムスの像が立っていました。

6日目はエルサレム旧市街地観光です。巡礼客が多いため朝早くから出かけました。12～3世紀の十字軍の時代に整備されたというヴィアドロローサの道を辿りつつ、ゴルゴタの丘（とされる）に建つ聖墳墓教会に行きました。ここはイエスの墓がある最も重要な巡礼地で、コンスタンティヌス大帝の生母ヘレナによって建立された教会です。この教会には聖書上の出来事に由来する礼拝堂が多くあり、キリスト教各派がそれぞれ管理し、また各派が門の所有権を争うために、毎朝の門を開けるのはムスリムの少年の仕事になっているということです。その後ダビデ王の墓、最後の晩餐の部屋、そして嘆きの壁に行きました。

嘆きの壁は、半分ずつ男性と女性に分けられていました。近くで見る黒ハット、黒スーツ姿の正統的ユダヤ教男性たちの熱心な祈りの風景は印象的でした。神殿崩壊後、ユダヤ人は年に一度許可されている来訪のたびに、帰郷の夢を抱きつつ、この場所で祈るようになったということです。壁の石の隙間に多数、白いものが詰まっているのは、人々の悲願を記した紙片です。それが夜になると夜露が石の間にたまり、壁に生えるヒソプの草を伝って落ちてくるために、あたかも涙を流すユダヤ人の姿を映しているかのようで、いつの頃からか嘆きの壁と呼ばれるようになったということです。故郷をなくした流浪の民、ユダヤ民族の悲しくも重い歴史をあらためて感じられました。



オリブ山より



嘆きの壁

その後、イスラエル博物館に行きました。ここは国の文化的遺産の宝庫ともいえるべき見応えのある博物館でした。博物館前には第二神殿時代のエルサレムの模型が、精巧に 50 分の 1 に縮小されて展示されていました。まさに 2000 年前のエルサレムの再現です。最も関心を引いたのは死海写本館でした。死海写本は 1947 年の第一次中東戦争直前に、死海西北のクムランで迷子になった羊を探していたベドウィンの少年が、洞窟の中に石を投げたところ何かが割れる音がして、入ってみたところ偶然に発見されたものです。それは紀元前 3～紀元後 1 世紀に羊皮紙やパピルスに筆写されたもので、今日発見されている聖典の中で、世界最古のヘブライ語聖典です。これは 20 世紀最大の考古学的発見とも呼ばれています。展示されているのはイザヤ書の一部でした。

7 日目の最終日は国境を越え再びアンマン空港への道程です。エルサレム郊外に近代的な建物のヘブライ大学のキャンパスが見えました。この大学は離散したユダヤ民族の再統合と滅びかけたヘブライ語の再構築をかけて、1920 年代に創立された民族悲願の大学で、アインシュタイン博士がその開学記念講演をしたことで有名です。そうした説明を聞いた後、国境の厳しい検問をへて一路アンマン空港に向かい、関空への帰路につきました。

今回の旅行期間中、ほとんどの日が晴天に恵まれました。短い旅程でしたが今回は 3 度目のエルサレムツアー申し込みで、ようやく実現した旅でした。前 2 回は出発 1～2 カ月前になると状況不安で旅行社として責任が持てないとして催行中止になりました。今回の旅は聖地といってもイスラエル北部のナザレやガリラヤ湖周辺には行っていません。しかしゴラン高原を巡って、イスラエルとシリア間の戦争再燃の危機が予想されている現在、エルサレム周辺だけでも行くことができたことは幸いなことだと思っています。聖地旅行は長年の悲願だっただけに、これまでの数多い海外旅行経験の中で最も印象に残る旅となりそうです。実りの多い恵まれた旅ができたことを、ただただ神様に感謝するばかりです。